

町民参加の町史づくり



竹富町史だより

2013・3・31

第34号



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1
TEL (0980) 82-6191

目次

『竹富町史』第三卷「小浜島」を発刊……………	1
第30回竹富町史編集委員会……………	2
業務日誌 二〇一二年度……………	3
〔書評特集1〕	
『竹富町史 第二巻 竹富島』について……………	6
・〔書評〕『竹富町史 第二巻 竹富島』……………	真榮里 泰山
・島を味わう百科事典……………	漢那 敬子
・島人が描く島の自画像……………	波照間 永吉
・未来を創り出していくために……………	家中 茂
・竹富三郷友会の未来を創る……………	狩俣 恵一
『竹富方言辞典』と『竹富町史 第二巻 竹富島』……………	波照間 永吉
・〔新刊紹介〕『竹富町史 第二巻 竹富島』……………	酒井 卯作
・〔書評〕『竹富町史 第二巻 竹富島』……………	波照間 永吉
〔書評特集2〕	
『竹富町史 第三巻 小浜島』について……………	13
・小浜島を知るための手引き……………	石垣 博孝
・壮大な生活文化の叙事詩……………	杉本 信夫
・「果報の島」の歴史と文化……………	波照間 永吉
・『竹富町史 第三巻 小浜島』を読む……………	大城 學
《写真に見るわが町》30 島びとの憩いの場である共同売店……………	18
《文化財探訪》25 大竹祖納堂儀佐屋敷跡……………	19
『竹富町史 第二巻 竹富島』正誤表……………	20
平成24年度受贈図書一覧……………	21
竹富町史の刊行物……………	24
編集後記……………	27

●表紙の写真●

由布島の電話通信工事は1966年（昭和41）に始まり1967年（同42）に終了した。開通式は同年3月31日に行われた。電話開通式典は琉球電電公社の新里総裁が出席し喜びを分かち合った。会場の由布小中学校には校門の上には「歓迎・琉球電電公社 新里総裁御一行」と大書した横断幕を掲げて出迎えた。新里総裁が直接、島を訪れたことは電話通信に並々ならぬ意欲を感じさせた。電話通信の開通は、島の地域振興に弾みつき、人々を喜ばせた。

『竹富町史』第三卷「小浜島」を発売

島の歴史・伝統文化など網羅



発売した第三卷「小浜島」

竹富町史の島しま編の中で第二弾となる第三卷「小浜島」を、平成二十三年事業として発売しました。記者への発表については、登野原武委員長が都合による欠席のため、新本光孝専門部会長が「島の特性と歴史的発展について総合的に検討している。島の次代を担い、発展にかかわるバガナー（若者）への贈り物である、最大限に活用してほしい」と完成を喜びました。

有人島九つ、無人島七つの島々を抱える「多

島一町」の竹富町は、それぞれの島の個性を際立たせるため、町史編集事業で「島しま編」を企画しています。「小浜島」編は「竹富島」編に続き二番目の刊行に当たります。発売に向けては、平成十六年度に「小浜島」編専門部会を発足させました。以後、島の出身者が島の史資料を駆使して、「手づくりの原稿」を執筆することを基本にして作業を進めました。

だが、離島のため島に残る文献は数が知れており、専門部会では石垣島の県立図書館八重山分館や沖縄本島の琉球大学図書館などに外向き、多くの史料、資料を収集しました。また、島の長老や婦人会の力も借り、根気強く編集作業に当たりました。

本巻は、「農業に支えられた伝統芸能、織物、観光の島」、「島の五つの顔」、「小浜島の心」を三本柱に、さらに細かく「五つ顔」は、「世果報の顔」「暮らしの顔」「祭り」と芸能の顔、「観光と交流の顔」「学校づくりの顔」を上げています。「小浜島の心」では、「小浜島の薫り」「小浜島」をうたい継いだ島びとの心」を基本に成り立っています。

本書の内容は、「かふぬ（果報の）島 小

浜」を序章に「島の概況」「自然」「歴史と伝承」「教育」「人と暮らし」「信仰と祭祀」「人生儀礼」「民間伝承」「交通・運輸・通信・情報」「保健・衛生」「伝統文化」「娯楽・競技」「人物」「歴史年表」、終章「ちゅうさんの島 小浜」で締めくくる、十六章で構成されています。各章は島民を含め、島にゆかりのある二十四人が執筆しています。

特に注目されるのは、集落発祥の歴史や方言、旧来の地図に載らない口承の地名一〇〇余種を詳細に記載したこと。さらに、自然や動植物、日本復帰をまたいだ暮らしの変化などの記述も充実しています。

「小浜島」はB五判で巻頭カラー八頁、本文六八〇頁。表紙には小浜島にしかない、見ればすぐに小浜島と分かる伝統歌舞の「ダートウダー」を使用しています。さらに、小浜島の島の形状を取り込んだ、親しみやすい本巻になっています。

発売について川満栄長町長は「島の特徴は先人、先輩が築き上げた宝物です。地域をつくってきた先人、編集に携わった方々に感謝したい」と述べました。また、町教育委員会の慶田盛安三教育長は「学術的にも素晴らしい、日常の中でも活用して小浜島のことを知ることができる」と発売を喜びました。

町史第三卷「小浜島」は頒価三、一五〇円（税込み）。石垣市内、沖縄本島の書店で発売しています。

第三〇回

竹富町史編集委員会

第三〇回竹富町史編集委員会が、平成二五年二月二日（金）竹富町役場委員会会議室にて次の日程で開催された。

一 竹富町史編集委員委嘱状交付式

（一）竹富町史編集委員委嘱状交付

（二）竹富町教育委員会教育長のあいさつ

二 竹富町史編集委員会

（一）編集委員長、副委員長の選出

（二）編集委員長あいさつ

（三）経過報告

（四）審議

議題①発刊の報告

②島じま編進捗状況の報告

竹富町史編集委員会の出席者は編集委員十

六人（欠席者二人）、事務局三人。

町史編集委員会に先立ち、編集委員の任期満了に伴い、次の十八人に委嘱状が交付された（◎は委員長、○は副委員長）。

阿佐伊孫良（竹富町老人クラブ連合会会長）

安里精善（南城市文化協会会長）

新本光孝（琉球大学名誉教授）

石垣金星（西表をほりおこす会会長）

石垣久雄（石垣市文化協会会長）

上江洲儀正（南山舎代表取締役）

大城 肇（琉球大学副学長）

黒島精耕（元竹富町教育委員会教育長）

里井洋一（琉球大学教育学部教育学部教授）

玉城功一（元八重山商工高校教諭）

◎登野原武（元竹富町教育委員会教育長）

○西里喜行（琉球大学名誉教授）

坂座真武（黒島伝統民俗芸能保存会会長）

嶋間真英（元黒島小中学校校長）

花井正光（元琉球大学教諭）

本田昭正（元那覇高校教諭）

三木 健（元琉球新報社副社長）

吉川安一（名桜大学名誉教授）

教育長・慶田盛安三が編集委員各位に委嘱

状を手渡し、「編集事業が計画通りできるよう、今後も編集委員の皆様にお力添えをいただきたい」とあいさつした。また、「竹富島

編『小浜島編』は、島がコンパクトにまとまって親しみがあがり、地域の教育にも積極的に

活用していきたい」と述べた。

第三〇回竹富町史編集委員会開催にあたり
新期役員が決定した。互選により委員長に登
野原武氏が選出され、委員長の指名により副
委員長に西里喜行氏が留任することになった。
登野原委員長は、これまでの町史編集事業を
ふりかえりつつ、「竹富島」「小浜島」発刊を
喜び、「島じま編」が計画どおり完遂できる
よう、事業へのさらなる協力を呼びかけた。
島々からの報告について、竹富島・小浜島
両専門部会から発刊と販売状況の報告があり、
各書評が紹介された。その他、各専門部会か
ら進捗状況と今後の計画が発表された。来年
度は「新城島」編、「嶋間島」編を発刊する
ことが確認された。西表島編専門部会から分
冊の提案があり、議論の結果、部会は来年度
中に具体的な内容と頁数を提示することが求
められた。

その他、「索引について」「自然編について」
「郷友会編について」が議論された。索引に
ついては、「島じま編」完結後に索引巻をつ
くることが決定した。「自然編」は小委員会
が中心となって、世界自然遺産登録も視野に
入れて進めることが確認された。「郷友会編」
は小委員会を立ち上げ、「島じま編」と並行
して取り組むことが決定した。

業務日誌 二〇一二年

三月三十一日 光文堂コミュニケーション(株)、南山舎(株)

と『竹富町史 第三巻 小浜島』の印刷製本について、納入期限変更の改定契約を交わす。

四月一日 美崎運輸倉庫整理。

四月一日 『竹富町史』より 第三三号「各公民館に送付(四月中)」。

四月十八日 沖縄竹富郷友会と『竹富町史 第二巻 竹富

島』八〇冊の売買契約を交わす。

五月一日 安里精善氏の新城島編原稿「農業」「戦争と新城

島」受理。

五月一〇日 美崎運輸倉庫整理。

五月一二日 『沖縄タイムス』に、波照間永吉氏の書評「島

人が描く島の自画像——『竹富町史 第二巻 竹

富島』——掲載。

五月十八日 『沖縄県地域史協議会会誌』第三五号へ原稿提

出。

五月二十四日 光文堂コミュニケーション(株)、『竹富町史

第三巻 小浜島』八〇〇冊納品。

五月二十七日 『たけとみ vol 50』に、狩俣恵一氏の書

評「竹富三郷友会の未来を創る『竹富方言辞典』

と『竹富町史 第二巻 竹富島』掲載。

五月三十一日 職員一名那覇出張。明治期波照間島の土地関連

資料調査(沖縄県立公文書館)、鳩間島編執筆者

連絡協議会準備会議(琉球大学大城肇研究室)、

琉球大学附属図書館。

六月一日 沖縄県地域史協議会二〇一二年総会及び第一

回研修会に出席し、飯田泰彦が研修会で『竹富

町史 第二巻 竹富島』『竹富町史 第三巻 小

浜島』の編集を終えて」を報告。

六月一三日 『竹富町史 第三巻 小浜島』発刊記者会見(竹

富町長室)。

六月十八日 『竹富町史 第二巻 竹富島』正誤表完成。

六月二十日 小浜公民館と『竹富町史 第三巻 小浜島』五

〇冊の売買契約を交わす。

六月二十五日 沖縄県小浜郷友会と『竹富町史 第三巻 小浜

島』五〇冊の売買契約を交わす。

六月二十九日 第一二回「新城島」編専門部会開催。

七月 六日 石垣在小浜郷友会と『竹富町史 第三卷 小浜

島』三〇冊の売買契約を交わす。

七月 一二日 石垣在小浜郷友会と『竹富町史 第三卷 小浜

島』五〇冊の売買契約を交わす。安里精善氏の

新城島編原稿「戦後のあゆみ」受理。

七月 一三日 『八重山日報』に、家中茂氏の書評「未来を創

り出していくために」『竹富町史 第二卷 竹

富島』一」掲載。『八重山日報』に、石垣博孝

氏の書評「小浜島を知るための手引きに」『竹

富町史 第三卷 小浜島』一」掲載。

七月 一四日 小浜島にて『竹富町史 第三卷 小浜島』出版

祝賀会開催（小浜公民館主催）。

七月 一八日 沖繩在小浜郷友会と『竹富町史 第三卷 小浜

島』一五冊の売買契約を交わす。

七月 二〇日 沖繩伝承話資料センターに新城島の民話・伝説

に関する資料の請求。

七月 二七日 沖繩在小浜郷友会と『竹富町史 第三卷 小浜

島』一〇冊の売買契約を交わす。

八月 四日 『沖繩タイムス』に、杉本信夫氏の書評「壮大

な生活文化の叙事詩」『竹富町史 第三卷 小

浜島』一」掲載。

八月 一二日 『琉球新報』に、波照間永吉氏の書評「果報の

島』の歴史と文化」『竹富町史 第三卷 小浜

島』一」掲載。

八月 一四日 第五回「鳩間島」編専門部会開催。

八月 一九日 島袋綾野氏の原稿「先史時代の新城島」受理。

八月 二一日 吉川英治氏に「鳩間島」編専門部会委員を委嘱。

八月 二四日 安里精善氏の新城島編原稿「人と暮らし」受理。

八月 二八日 第一三回「新城島」専門部会開催。

九月 二〇日 安里精善氏の新城島原稿「交通・情報・通信」

受理。

九月 二三日 新城島の結願祭取材・見学。

一〇月 二日 二〇一三年全国やいまびと大会 写真展「伸

びゆくやいま」企画会議（広域事務所）。

一〇月 六日 西表島船浮村の節祭取材・見学。

一〇月 二三日 石垣繁氏の新城島編原稿「新城島の言語」受理。

一〇月 二九日 鳩間島の結願祭取材・見学。

一一月 一二日 「鳩間島」編、吉川安一氏の「民俗知識」他、

加治工真市氏の「鳩間方言」受理。

一一月 一五日 南嶋民俗資料館収蔵のパナリ焼の写真撮影。

一月二〇日 『八重山毎日新聞』に、大城學氏の書評「『竹富

町史 第三巻 小浜島』を読む」掲載。

二月 三日 二〇一三年全国やいまびと大会 写真展「伸

びゆくやいま」企画会議（石垣市史編集課）。

二月 六日 崎原毅氏（南嶋民俗資料館館長）に原稿「南嶋

民俗資料館収蔵のパナリ焼について」、保尊脩氏

（国立科学博物館研究部）に原稿「ジュゴンの

DNA鑑定からわかること」を執筆依頼。

二月二一日 石垣在小浜郷友会と『竹富町史 第三巻 小浜

島』一〇冊の売買契約を交わす。

二月二二日 「西表島」編原稿締め切り。

二月二四日 大浜博吉氏撮影の写真調査（八重山毎日新聞社）。

二月二八日 第一四回「新城島」専門部会開催。

二月二九日 前津栄信氏の原稿「自然」について編集会議（前

津栄信氏、登野原武氏、事務局）。登野原武氏の

新城島編原稿「終章」受理。

二月二〇日 二〇一三年全国やいまびと大会 写真展「伸

びゆくやいま」企画会議（広域事務所）。玻座

真武氏の黒島編原稿「伝統文化」受理。

二月二二日 「鳩間島」編原稿締め切り。宮良當皓氏の黒島

編原稿「畜産」受理。

二月二五日 美崎運輸倉庫整理。

◆二〇一三年（平成二五年）

一月 七日 吉川安一氏の鳩間島編原稿「民俗知識」、大城公

男氏の鳩間島編原稿「人生儀礼」受理。

二月二二日 第三〇回竹富町史編集委員会開催。編集委員委

嘱。

三月 八日 二〇一三年全国やいまびと大会 写真展「伸

びゆくやいま」開催。（二〇日）。

三月十一日 黒島礼美氏の新城島編の原稿「パナリワラバ

ズの活動とその背景」受理。

〈書評特集1〉

一、『竹富町史 第二巻 竹富島』について 書評『竹富町史 第二巻 竹富島』

真栄里 泰山（沖縄大学客員教授）

待望の竹富町史第二巻『竹富島』が刊行された。既刊の十六巻の資料編とともに、域内離島を「島じま編」としてそれぞれ一巻の通史として独立させ、それを総合して町全体の通史を浮かび上がらせようという竹富町の編集計画。その注目のトップランナーが、今回の『竹富島』編である。十六もの島々からなる島嶼町・竹富町ならではのユニークなこの方式は、島嶼県の地域史編集のあり方として高く評価されるものだ。

竹富島に関してはこれまでも実に数多くの研究書や出版物がある。最近では八重山毎日文化賞、菊池寛賞、沖縄タイムス出版文化賞を受賞した前新透氏外の大著『竹富方言辞典』が話題となったが、この『竹富島』編の刊行で島への関心はまた一段と高まりそうだ。

沖縄竹富郷友会歌にもあるように、「神島」「要島」「うつぐみの島」として、八重山で独特の位置を占める竹富島。多くの御嶽、伝承、遺跡が伝えられ、民俗芸能や祭祀行事、景観や土地を守る活動等々、重要伝統的な島社会を保存維持するため島人の懸命な努力が続けられている島である。

国指定重要無形民俗文化財の種子取祭をはじめ伝統的建造物群保存地区、自然景観保全ゾーン、生産景観形成ゾーンなど歴史的景観形成地区の指定など、島全体が「歴史民俗博物館」といえる、美しい人情豊かな島である。

今回の『竹富島』編は、序章、島の概況、集落と自然、歴史と伝承、教育、人と暮らし、信仰と祭祀、人の一生、言語伝承、竹富島の芸能、人物、年表、終章の十二章構成。島の歴史を先史時代から現代まで総覧するとともに、竹富島の島社会の各分野を網羅して、要領よく解説紹介した学術性の高い「竹富島総合百科事典」というべきものとなり、装丁もB5判、七〇〇ページの大型本である。

歴史と伝承の分野は、これまで比較的多かったフォークロア的な歴史叙述から、歴史科学的に整理され充実した通史となった。発掘遺跡の検証をはじめ竹富島の村創生のムーヤマ（六御嶽）の神々を「文化英雄」とし、オヤケアカハチや群雄割拠といった時代評価、琉球王国の八重山統治機構として竹富島に蔵元を設置した武富首里大屋の西塘を「古琉球から近世琉球を結ぶ人物」として八重山史に位置付けるなど随所に新しい見解がうかがえる。

また、薩摩侵攻後の検地や人頭税制など、竹富島の寄百姓分析や人口推移などの実態が解明され、「道切り」という強制的な寄百姓政策の効果が、結果的には琉球の財政立て直しではなく、島々の増大する人口対策と耕地確保であったと指摘するな

ど、島の中世・近世史像が明確となっている。

表は、この島の趨勢を示す極めて興味深い史料である。現在三

の懸命な努力が続けられている島である。

ど、島の中世・近世史像が明確となっている。

また、これまで手薄だった島の近現代史についても、異国船来航、廃琉置県、日清の琉球分割交渉など、琉球沖縄史全体を展望しつつ島の歴史過程が語られる。明治政府による土地整理、町村制の施行はじめ日清・日露戦争、徴兵、忠魂碑や皇民化教育、標準語教育、国家総動員体制による太平洋戦争が、平和な島共同体をどう巻き込み、展開されたかなど、辺境で強行された日本国家の統合過程を明快に整理して、歴史の縮図としての島社会を浮かび上がらせ、歴史の教訓をさりげなく伝えるものとなっている。

とりわけ、民俗学の宝庫として内外の関心が高い島の信仰や祭祀、暮らしの分野においては、最新の学術的成果がいかんなく盛り込まれている。ムーヤマ信仰の分析、種子取祭と火の神ゆるやかな祭祀集団の指摘などは、竹富島の人々や社会の特質に迫る分析でもあろう。衣食住、人生儀礼、生業、労働慣行など多様な項目や詳細な解説といい、島出身の狩俣恵一・沖国大教授をはじめ島人の参加で、竹富島の民俗文化誌としては、これ以上ない決定版にしている。

竹富島では現在、竹富島憲章の制定、地縁団体法人竹富公民館、NPOたきどうん、全国竹富島文化協会の組織など、島人の自主的自律的な地域づくりが続いているが、この『竹富島』編は、これら島づくり、地域づくりの報告書ともなるものだ。

一六四七年から二〇一〇年まで三六三年間の竹富島人口動態

く、島々の増大する人口対策と耕地確保であったと指摘するな

表は、この島の趨勢を示す極めて興味深い史料である。現在三一七人の島人口に対し来島者は年間三〇万人を超え島はにぎわっているが、少子高齢化、過疎化が解消されているわけではない。グローバル化する政治経済、行財政改革の中で、この本にまとめられた島の豊かな民俗祭祀、暮らしは将来どうなっていくのだろうか。近年は島嶼防衛論が声高になるなか、平和な島社会の内発的發展、地域の持続的發展はどうしたら可能なのか。悩みは尽きない。日本返還四〇年を迎える沖縄では、自立志向が一段と高まっているが、島々の振興をどうするかは大きな課題である。この国の国民幸福度も見直され始めているが、この竹富町史『竹富島』の刊行を契機に、あらためて沖縄の島じまの過去・現在・未来について考えたいものである。

（『八重山毎日新聞』二〇一二年二月二十八日付より転載）

島を味わう百科事典

漢 那 敬 子

（沖縄県教育庁文化財課史料編集班）

地域史に魅力的な一冊が加わった。竹富町史本編・島じま編の最初の本『竹富島』である。「町史」とひとくくりにするが、七つの有人島を抱く竹富町では、島ごとにちがった風土、歴史の歩みがある。その意味でも本書はまさに「本編」であり、待ち望まれていた書である。十八人に及ぶ執筆者のほとんどが島

の人だということのも本書の特徴の一つだろう。それに加えて歴史や祭祀、言語については研究者が執筆した章も織り込んでおり、最新の研究成果もうかがえる質の高いものになっている。

第一章「集落と自然」に始まり、「歴史と伝承」「教育」「人と暮らし」「信仰と祭祀」「人の一生」「言語伝承」「竹富島の芸能」「人物」「年表」の一〇章、総頁数七〇〇と大部の書であるが、一つ一つの章は細かく見出しが立てられていて読みやすい。

例えば本書の三分の一強を占める第2章では、島の根源的な御嶽・ムーヤマの成立についての論考があり（狩俣恵一）、古琉球期から近世の竹富について、島に軸足を置きつつ八重山や王府を逆照射し（得能壽美）、琉球処分から廃琉置県、さらにその背後にある欧米列強の東アジア再編というダイナミックな動きを史料にそって丹念に記述し（西里喜行）、大正期から昭和期はさまざまなエピソードで時代の諸相を描き（阿佐井係良）、日清・日露戦争に始まる島の戦死者の横顔を詳細な聞き取り調査によって描かれる（富田哲）。

第四章・第六章では、島の生活が島びとならではの具体的・実地的な目線で記されている（上勢頭同子・与那国光子・上勢頭芳徳・島仲玲子・与那国久枝・石垣久雄）。第九章では口碑伝承から現在に至る約二〇〇人も的人物を取り上げた竹富島人物辞典とでもよぶべきもので、これもまた島びとならではの調査の成果だろう。

本書は、竹富島をまるごと味わえる百科事典とでもいうべき

いる、と言ってよいだろう。

本にしあがった。他の島々編が南の海のなかから装いも新たに浮かび上がってくるのを期待したい。

（『琉球新報』二〇一二年三月十一日付より転載）

島人が描く島の自画像

波照間 永吉

（県立芸術大学附属研究所教授）

竹富町は島嶼県沖縄にあっても、さらに特徴的な「多島一町」の町である。行政も教育もそれのもたらすさまざまな問題に悩まされてきた。しかし、一方では、これだけの島がその独自の風土と歴史、そして先祖の歩みの中で培われた個性豊かな文化を保持するという、かけがえのない価値を有していることもまた事実である。

「竹富町史」がこの相反するようなところに立つ自らの「町史」をどう構築していくかは、難問でもあり、また、そのオリジナルな発想を発揮する格好の場面でもあったはずである。本書は、そうした難問を乗り越えて示された、美しき解答である。

B五判、一ページ左右二段組、約七〇〇ページの大冊である。そのすべてが竹富島の自然・歴史・教育・生活・信仰祭祀・人の一生・言語伝承・芸能の記述に充てられている。その執筆者は、ほとんどが島出身の研究者である。ここにも本書が、島の歴史・民俗・文化と密着したものであるとする姿勢が表れて

に待った「竹富町史／島じま編」の発刊である。冒頭に掲げら

本書は、竹富島をまるごと味わえる百科事典とでもいうべき

いる、と言ってよいだろう。

言い古されたことであるが、柳田國男は民俗学のあり方として、その地に生まれ育ちそこに暮らす人の手になるものを目指すべきとした。本書は、柳田の望むその姿を実現したものといえる。島の人しか知りえない多くの事柄を、研究書としての質を保持した書物として記述していったのが本書なのである。

島にゆかりをもつ人々にどれだけ勇気を与えることだろう。島の歴史の始まりから、琉球国時代、日本国の一員として歩んだ近代、戦争。戦後の混乱期を越えてたどり着いた現代。多くの先人が島のために働いた。これらの人々に対する敬愛の念と親近感。そして、遠い昔からの島の民俗、祭り、芸能。これらがわかりやすく書かれている。これまでの沖縄の市町村史とは一味違うように思われる。

『竹富町史』はその中核をなすものとして「島じま編」を位置づけている。本書「竹富島」編はその初めの一冊であり、これを手にした他の島々の人々はきっと「わが島編」を心待ちにしていることだろう。続巻を期待したい。

『沖縄タイムス』二〇一二年五月十二日付より転載

未来を創り出していくために

家中 茂（鳥取大学地域学部）

目次をめくると、見覚えのある懐かしい写真がならぶ。待ち

に待った『竹富町史／島じま編』の発刊である。冒頭に掲げられた、川満栄長竹富町長や登野原武町史編集委員長の発刊に寄せる言葉からも、並々ならぬ意気込みが伝わってくる。

『本土復帰』四〇年といわれるこの時期に発刊されることにも、『竹富町史／島じま編』の歴史的意義が表れているだろう。歴史書はすべからず、未来を指向して書き改められてきた。かくあるべしという未来の一点から、過去を振り返って再構成するのが歴史書である。竹富町史第二巻として「竹富島」編がその指向する一点として提示しているのが、「終章 竹富島の過去・現在・未来」である。全七〇〇ページに及ぶ大著のなかで、なかんずく竹富島住民にとっての本書発刊の意義が力強く説かれていく。

「時代はどのように変わっても、島の気高さと気品を失わない島であって欲しい。そのために現在の私たち竹富人は、何をなすべきであるかをいまこそ真剣に考えねばならない」。

竹富島の生きてきた歴史、「本土復帰」以降の歴史を生きてきた人々の手による本書を手にとってほしいのは、まずもっては竹富島住民であり、竹富町民であろう。しかしながら、本書を必要とする者は、それだけにとどまらず、もっと広い範囲にわたるだろう。

昨年から一緒に島の古老からの聞き書きをはじめた、森まゆみさん（作家、谷根千工房）が次のように語っていたことがあ

れらは原発事故以降の日本人がこれから手本にするべき暮らしである」と。

然り、本書には「日本人がこれから手本にするべき暮らし」がいかに創りあげられてきたのか、その歴史を担った一人一人の顔が思い浮かべられるように綴られているのである。折しも、本年六月一日には「星のや竹富島」がオープンした。島は、かつてもそうであったように、現在さらにいっそう、島外の人々とかかわりあいをつうじて歴史を更新している。

「金は一代、土地は末代」として闘われた土地の不買運動をもとに生まれた「竹富島憲章」が、重要伝統的建造物群保存地区の礎であり、現在、若者たちが島に還ってきて担っている観光の源である。沖に愛でられた島、竹富島の風光に浴する者は、旅人であつても企業家であつても、本書に綴られた歴史に学び、その指向する未来を見つめていってほしい。そのような願いの込められた歴史書が本書である。

本書の構成は、編集後記によれば、度重なる真摯な議論を経て、「序章 うつぐみの島 竹富島」に記された「竹富島の景観」「種子取祭」「うつぐみの心」という三つのテーマに収斂していったという。それは、この三つのテーマで執筆項目が分類できるといふ意味ではない。序章に掲げられた三つのテーマは、竹富島の歴史を読み解くための「問い」であり、同時に、指向する未来を創り出していくための課題設定である。「終章」で説かれている課題に向き合うためにも、この三つのテーマが、

竹富島住民にとつての「かけがえのない」歴史的な財産であり、歴史的な経験なのである。

第二章 歴史と伝承／第一節 伝承にみる竹富島」は、歴史をとらえる方法論上の重要な問題提起である。それは、歴史を「史実」としてだけでなく、現在をかたちづくってきた「経験の蓄積」として読み解こうとする態度の表明である。基礎的なこととして社会経済史的な実証は不可欠に違いないが、しかし、それにとどまらず、人々の精神が何を指向しているのか、それが社会（共同体）をどう構成し、制度をつくりあげ、目に見えるものとしての景観をかたちづくってきたのか。そのプロセスを読み解こうという壮大な構想と堅実な方法論に裏付けられているのが、本書の歴史書としての特色である。

この問題提起を私たちがどのように受けとめて、実践に生かすのか。まさに未来に向けて、「竹富町史／島じま編」全七巻の刊行がはじまったといえるだろう。

（『八重山日報』二〇一二年七月十三日付より転載）

竹富三郷友会の未来を創る『竹富方言辞典』と

『竹富町史 第二巻 竹富島』

狩 俣 恵 一（沖縄国際大学副学長）

ご存じのように石垣島・沖縄本島・本土には、竹富島を親島とする郷友会があり、それぞれの地域で特色ある郷友会活動を

説かれている課題に向き合うためにも、この三つのテーマが、

展開してきた。

石垣竹富郷友会は、竹富島に近いこともあって、親島（竹富島）の祭祀行事に積極的に参加するだけでなく、種子取祭の奉納芸能の一翼を担ってきた。沖縄竹富郷友会は、竹富公民館や祭祀行事への資金的援助を中心に活動してきた。また、東京竹富郷友会は、親睦及び相互扶助的な活動から種子取祭への参加を中心にした活動へと転換し、親島の芸能活動を積極的に進めてきた。そして、それら三郷友会の活動は、「ふるさとを想う気持ち」と「うつつぐみの心」を原点にするとともに、親島での生活を経験した一世の会員が中心となった活動であった。

また、全国竹富島文化協会が一九九六年に設立され、講演会及びシンポジウム、『星砂の島』を発行して、竹富島の文化及び芸能を学び、それらを島外に紹介する活動を展開してきたが、その活動は三郷友会の文化活動を活性化することにつながった。そして、近年の石垣竹富郷友会はムーヤマを学ぶことへの関心が高まり、沖縄竹富郷友会は「テードゥンム二に親しむ集い」を定着させつつある。また、東京竹富郷友会は、歌三線や踊りを中心にした活動を展開しようとの機運が再び高まってきた。

つまり、三郷友会は、竹富島の信仰・言葉・芸能などの文化を学び、「自分が何者であり、何をなすべきか」という個人の心を充実にすることに関心を抱くようになってきたのである。そして、そのことは一世のみならず、二世・三世にとっても大きな関心事であろうと思われる。また、竹富島以外の出身者で

とする郷友会があり、それぞれの地域で特色ある郷友会活動

あっても、精神的なゆとりや絆を求める方々は、「うつつぐみ」を基調とした竹富島の伝統文化は魅力的なものと考えられるようになった。

言い換えるならば、かつての島外者にとつての竹富島は、古き良き日本の姿を留める懐古趣味（ノスタルジー）的な島であったが、近年は「竹富島の文化を学び、みずからの生きがいを見出すための島」というふうに変わってきたのである。

そして、そのような折、一五〇〇頁余の『竹富方言辞典』が発刊され、七〇〇頁に及ぶ『竹富町史 第二巻 竹富島』の大著が相次いで発刊された。この二つの大著は、これまでの先学の研究を集約し、学術的にも高い評価を受けた著書であり、それと同時にその二冊の大著を活用することが、新しい三郷友会がそれぞれの独自性を活かしながら、その大著を活かして、親島とともに手を携えて活動することを期待する。

（『たけとみ vol.50』東京竹富郷友会、二〇一二年五月二十七日）より転載）

新刊紹介 『竹富町史 第二巻 竹富島』

波照間 永吉

（県立芸術大学附属研究所教授）

竹富町は島嶼県沖縄にあっても、さらに特徴的な「多島一町」の町である。行政も教育もそのもたらす様々な問題に悩ま

〈書評特集2〉

二、『竹富町史 第三卷 小浜島』について

小浜島を知るための手引きに

石垣 博 孝(石垣市文化財審議会委員)

竹富町は八重山のなかで最も多くの島を有する。そして島の持つ景観や性格がそれぞれ異なる、不思議な魅力に満ちている。竹富島、黒島、新城島、鳩間島などの珊瑚礁の島があるかと思ふと、西表島、小浜島のような山あり川ありの水田耕作に適した島がある。波照間島はまた別の性格を持った島といえよう。

当然のことながら自然環境の異なる島には、そこに順応して生きる人びとが築いた歴史や文化がある。島じまを訪ねるとその個性が肌をともし伝わってくるし、このように多くの個性に満ちた集合体が「八重山」なのだという実感を持つ。

このたび『竹富町史 第三卷 小浜島』が発刊された。竹富町史編集委員会が、竹富町の島を一つ一つとりあげ、「島じま編」として島の歴史や文化を伝える書の企画をたてた。その視点は竹富町ならではのものであり、卓見といえよう。この企画が推進され島じまの書が揃うことを楽しみにしている一人である。これまでに個人が「島誌」を出版した例はいくつかあり、それなりの成果を得ていることもたしかである。このような現実をふまえて多くの英知を集め、広く深い島誌を企画し、出版

までこぎつけた意義は大きい。

『竹富町史 第三卷 小浜島』の内容構成は、次のようになっている。

序章は「かふぬ島 小浜」。

第一章「島の概況」は、第一節「位置・面積・気候」、第二節「地名」、第三節「集落」、第四節「人口動態」。

第二章「自然」は、第一節「地形と地質」、第二節「海岸線と海」、第三節「動植物」。

第三章「歴史と伝承」は、第一節「島の夜明けと伝承」、第二節「先史時代と歴(原)史時代の小浜島」、第三節「オヤケアカハチと小浜島」、第四節「八重山蔵元の創設と間切制度」、第五節「近世期の八重山」、第六節「検地と人頭税」、第七節「異国船と火番盛」、第八節「寄百姓と新村建て」、第九節「明和大津波とその後」の状況、第一〇節「琉球処分後の小浜島の変遷」、第十一節「大正期の小浜島」、第十二節「昭和前期の小浜島」、第十三節「戦争と小浜島」、第十四節「終戦直後から日本復帰までの小浜島」、第十五節「日本復帰後の小浜島」。

第四章「教育」は、第一節「学校教育」、第二節「社会教育」、第三節「家庭教育」。

第五章「人と暮らし」は、第一節「社会生活」、第二節「衣食住と暮らし」、第三節「生業」、第四節「暮らしの変遷」。

第六章「信仰と祭祀」は、第一節「信仰」、第二節「祭祀」。

第七章「人生儀礼」は、第一節「産育」、第二節「婚姻」、第三

節「生年祝」、第四節「葬制」。

第八章「民間伝承」は、第一節「民俗知識」、第二節「ことわざ」、第三節「民話・伝承」、第四節「数理」、第五節「技術」、第六節「民間療法」、第七節「子どもの遊びと玩具」。

第九章「交通・運輸・通信・情報」は、第一節「交通・運輸」、第二節「通信・情報」。

第一〇章「保健・衛生」は、第一節「保健・衛生」、第二節「小浜島の医療」。

第十一章「伝統文化」は、第一節「言語」、第二節「歌謡」、第三節「民俗芸能」。

第十二章「娯楽・競技」は、第一節「娯楽」、第二節「競技」。

第十三章「人物」は、第一節「王府時代の人物」、第二節「近代の人物」、第三節「金錫勲章・勲章および国際表彰」。

第十四章は「歴史年表」。

終章は「ちゅらさんの島 小浜」。

以上あげた章や節の構成でもわかるように、小浜島の全面におよぶ内容を持っている。当然執筆にかかわった人も多く二十四人の名が見えるし、写真・資料の提供者も六十人を越えている。

時折り小浜島を訪ねる私たちは、定めた目的のもとに行動し、それ以外のことは目配りができない状態で戻ってくる。狭い領域のフィールドワークに終止せざるを得ないということである。それはそれでしかたのないことも知れないが、大きな忘

す。

当時、神ツカサでもあり、古謡やわらべうたの伝承者登野貞

れものをしていような思いにかられることは事実である。

今こうして盤石の構成と密度の高い『竹富町史 第三巻 小浜島』に触れると、あらためて自分の虚をつかれた思いがする。島の自然、歴史、文化、習俗などについて、通り一遍の浅い知識しかないことを思い知らされる。

『竹富町史 第三巻 小浜島』は手元に置いて折りあることに島を知り、理解するための辞書の役割と、更に踏みこんだ内容の吟味ができる貴重な資料として大切にしたい。

（『八重山日報』二〇一二年七月十三日付より転載）

壮大な生活文化の叙情詩

杉本 信夫（作曲家、沖縄伝承音楽研究）

七〇〇ページに近い重量感のあるずっしりした本が届いた。まさにこれは無土器時代から現代に至る、小浜島の歴史的、社会的な生活文化の壮大な叙事詩ではないか。

黒島精耕さんから誘われ、初めて小浜島を訪れたのは一九七〇年の八月だった。ソーラ（旧盆）の三日間、昼夜ぶつ通しで全戸を巡る、小浜独特の念仏者系集団巻踊について歩き、最終日にはナカミチの十字路で北と南の念仏衆が合流して、長老たちの見守る中、盛大に舞い踊る。長老で古謡の伝承者大久真徳さん（一八九四、明治二十七年生）から、わたしも女装してアンガマに加わるようにと指示され踊ってしまったのを思い出

『果報の島』の歴史と文化

領域のフィールドワークに終止せざるを得ないということである。それはそれでしかたのないことかも知れないが、大きな忘

す。

当時、神ツカサでもあり、古謡やわらべうたの伝承者登野貞子さん（一九〇二年、明治三五年生）も健在であつた。これらの方々の伝承遺産も本書によって確かに記録され、次代に受け継がれることになる。

「小浜節」で「大嶽（大岳、標高九九・四メートル）を後にした豊かな島」とうたわれているように、小浜島は山あり丘陵あり、他の隆起サンゴ礁の低島にはみられない利水性によって、水田をはじめ五穀豊穡に恵まれてきた。人々はそのような圧政の中でも、自然の神に感謝し、畏敬し、強い共同体的連帯性によって守られ生き抜いてきたのであつた。

旧暦八月、九月の四日間にわたる「結願祭」での北の弥勒神（めいらくじん）南の福祿寿を中心にした華やかな諸芸能、中でも復活された「ダートウダー」などの貴重な小浜の芸能、そして「種子取祭」での厳肅な祈願とアヨー（神歌）などが、「ソーラ」の歌舞とともに国の重要無形文化財に指定されている。

これらの見事な芸能の島の全貌がここに明らかにされたのである。本書は、島出身の編者たちが、先輩たちの著作や問題提起をもとに、島外の専門家による研究成果を精査し、適宜に写真や必要な歴史年表などを挿入しながら、平易な文章で読者に分かりやすく、島への愛情、愛着にあふれ、情熱をこめて執筆された島の宝である。

（『沖縄タイムス』二〇一二年八月四日付より転載）

アンガマに加わるようにと指示され踊ってしまったのを思い出

「果報の島」の歴史と文化

波照間 永吉

（県立芸術大学附属研究所教授）

ギリシャのオリンピアやバルテノンの神殿は、自らの神を崇める各部民の芸術的競争によって造り飾られたのだという。このことを思ったのは、黒島精耕氏はじめ本書の著者たちが、先に出た『第二巻 竹富島』を十分に意識し、より良い形で我が島の歴史と文化を記録に残し、次代を担う人々に伝えようとしていることが感じられたからである。島の人々による町史編纂の競争。その成果が見事に結集された一冊である。

「小浜てる島や果報の島やりば 大岳ばくさで白浜前なし」。八重山民謡の白眉「小浜節」はこのように誇らかに歌い出す。その歌の心は島人である本書の著者たちを貫くものであり、全ての島の人の思いでもある。島の中央北よりのところに大岳（九六m）があり、水にも恵まれ、古来稲作が盛んであつた。島の周囲にはサンゴ礁が発達し、海の幸にも恵まれ、明治以降、糸満漁民による村も出来ている。まさに「果報の島」である。草装の来訪神を祀る豊年祭や、国指定の無形民俗文化財に指定された祭事の芸能などで注目を集める島でもある。本書はその島の自然と歴史と文化を生き生きと描き出している。

「序章」から始まって「終章」まで全十六章。なかでも、「信

仰と祭祀「人生儀礼」の章に記された六十数篇の、小浜方言による願詞や口上・呪言は貴重である。願詞には神への敬虔な思いが籠められ、祭祀における総代などの口上には豊穰をひたすら願い、和睦して生きる共同体の心が満ち満ちている。これらには型と呼ばれるものが備わっており、文化としてあることが知られる。琉球文学や民俗文化、言語研究の資料として大きな価値を有するもので、第十一章「伝統文化」の項と並んで、評者などには有難い。また、第二章「自然や動植物」では自然科学の成果がわかり易くまとめられている。「技術」「民間療法」「子供の遊び」等が入ったのも良い。小浜島を知る為の必須の一冊の誕生である。

最後に一言。これだけ充実した大著でありながら索引が付いていないのはなんとも残念である。これは今後の巻とも関わることである。読者の利便性を図るためにも、また著者たちの熱意に報いるためにも、何らかの形で実現して欲しい。

『琉球新報』二〇一二年八月十二日付より転載

『竹富町史 第三巻 小浜島』を読む

大城 學（琉球大学法文学部教授）

私のふる里の鳩間島で、小学校高学年のときに島のほぼ中央に位置する中森（中岡）に、親戚のおじいさんと登った。島の南には西表島があり、目を左の方（東方）へ移動させると小浜

島が見え、そして石垣島が見える。おじいさんは、この三つの島は水が豊富で、稲作ができる果報の島だよ、と教えてくれた。当時、日々の暮らしで水に不自由をきたし、西表島に通って稲作をしていた鳩間島と比べれば、この三つの島はユートピアだと思ひ描いていたことを覚えている。

小浜島にはじめて渡ったのは、一九七三（昭和四十八）年の八月であった。同じサークルで活動していた上盛政秀さんの案内だった。大嶺秀雄翁から小浜島の芸能の話を知り、フェーヌシマ系統の芸能であるダートウダーの歌と演技（踊り）を覚えていただいた。そのときに、大岳に登った。三六〇度見渡せるパノラマが展開し、竹富町の有人島が一望できる。大岳の麓には水田が広がっている。小浜島の歌詞によまれているように、文字どおり世界果報の島であることを実感した。

一九九〇年代に入って、小浜島へは祭祀および芸能の調査で何回機会が増えた。旧暦七月のお盆（ソーラ）からタマスコーサミまでの儀礼、旧暦九月・十月の結願祭（シツ、シツングトウ、ユーニンガイ）、結願祭の後に行われる種子取祭（タナンドウル）などを、島の人たちの協力によって調査した。狂言、舞踊、古謡、節歌（三線歌）といった芸能の種目や内容についても、実に果報な島であることがわかった。

その果報の島・小浜島の自然・歴史・文化を記録した『竹富町史 第三巻 小浜島』が上梓された。序章「かふぬ島 小浜」から終章「ちゆらさんの島 小浜」まで、全十六章、およそ七

〇〇頁からなる同書は充実している。小浜島の過去と現在を知

増強、災厄鎮送を祈願し、明日からの生活に希望を持つことに

に位置する中森（中圖）に、親戚のおじいさんと登った。島の南には西表島があり、目を左の方（東方）へ移動させると小浜

〇〇頁からなる同書は充実している。小浜島の過去と現在を知ることができ、さらに次代を担う人たちへ継承してほしいという執筆者十九名の熱い思いが込められている。

紙幅の都合で全十六章の内容を紹介することはできない。祭祀および芸能関連で第六章「信仰と祭祀」、第七章「人生儀礼」、第十一章「伝統文化」をみると、儀礼過程や芸能の内容は言うにおよばず、呪詞や歌詞、詞章が丁寧に記録されていることに気付く。さらに、公民館長や部落会長、ナカス、スータイといった役職の挨拶、メーラクヤー（弥勒家）当主の挨拶なども記録されている。祭祀に対する島人たちの敬虔な気持ちが現れている証である。

小浜島の人たちが、豊かな自然の中で暮らしていること、それだけで果報ではないであろう。懸命に耕作した稲が台風が襲来すると、一瞬にして豊作が望めない。畑作の収穫もままならない。海の幸だって不漁になることだってある。村人の暮らしには自然の驚異がつきまとっている。自然環境の厳しいところでは、島人はこれでもかこれでもかと懸命に働き、あとは村落の悪霊や災厄を祓う儀礼を行い、豊作・豊漁を予祝する儀礼を行う。そして、豊稔の収穫後は神に感謝をする。祈願や感謝が呪詞や芸能として表現されるのである。芸能の宝庫といわれることの礎になっているのが、こうした島人の豊稔を願う敬虔な気持ちなのである。

そして、祭祀の集団行動をとおして、島人の生命長久、生産

町史 第三巻 小浜島』が上梓された。序章「かふぬ島 小浜」から終章「ちゅらさんの島 小浜」まで、全十六章、およそ七

増強、災厄鎮送を祈願し、明日からの生活に希望を持つことになる。また、祭祀や芸能の教習をとおして、大人になるための鍛錬を積むと同時に、島の歴史や文化を習得する機会にもなる。歌舞修練をとおして島人相互の交流を果たし、連帯意識を強化することにもなる。さらに、祭祀に結集する島人の生命力の昂揚によって、明日からの生産への意欲を強めることになる。

祭祀や芸能にはこうした信仰的機能、教育的機能、社交的機能、生産的機能といった面で村落の生活づくり、人づくりに貢献する、いわゆる社会的機能が備わっている。このことは、なぜ人びとは祭祀や芸能を行うのかという原点を知ることでもある。それを小浜島の祭祀・芸能調査をとおして確認したし、『竹富町史 第三巻 小浜島』の頁をめくるとそのことが伝わってくる。多くの方に読んでいただきたい書物である。

『八重山毎日新聞』二〇一二年十月二十日付より転載）



波照間島に5つある共同売店（1969年）『沖縄の孤島』より転載

〈写真に見るわが町〉 30

島びとの憩いの場である共同売店

共同売店といえ、百年以上の歴史を持つ国頭村奥集落が、よく知られている。共同売店とは、島の人びとが共同体意識に基づいて、編み出した商業組織。波照間島には北、南、前、名石、富嘉の五つの全部落に売店がある。

売店の名は丸友売店（北農友共同組合）、南共同売店、波照間前売店（まるま売店）、名石売店、富嘉共同売店。売店の運営は、どれも住民の共同出資によってなされており、いわば「生活協同組合」のようなものだ。設立は五つの売店とも戦後で、最も早いのが丸友売店の一九五二年（昭和二七）。そして、次々と組織化され、一九六二年（同三七）にはすべての部落に誕生した。

島の売店の機能は経済的機能が中心で、そのなかでも購買活動が主たる業務になっている。運営方式は二種類あり、島の場合は直接経営で進めている。このなかで、丸友売店の場合は部落から組合長、会計、監事、理事を選出して経営に当たっている。

売り子は二、三人の主婦によって、ひと月二、三回の交替勤務制がとられ、さらに労働時間を軽減することから十二時〜三時ごろまでは閉店されている。このなかで、売り子のなり手が少ないこと、さらに主婦層が少ないことから苦渋を強いられているのが現状だ。

売店では店の入り口の側にテーブルや椅子が置かれ、そして、そこは島びとの憩いの場であるとともに、情報交換の場でもある。写真は一九六九年（昭和四四）の丸友売店前の様子。食料品の買い物客、売店に用事のある人々など、売り上げ計算するカウンターの少しばかりの雑踏をみせている。

しかし、人口が減少した今、そこを利用する人も少なくなつた。それに近年、高速船の運航など、交通の利便性が良くなった上に石垣市のスーパーから安い商品を個人で購入する島びとが増えた。これも時代の趨勢かも知れない。往時と違い人口減少は寂しい限りだ。

（通事孝作）



交通の便が良くなった上に石垣市のスパーから安い商品を個人で購入する島びとが増えた。これも時代の趨勢かも知れない。往時と違い人口減少は寂しい限りだ。
(通事孝作)

《文化財探訪》 25

大竹祖納堂儀佐屋敷跡

大竹祖納堂儀佐は、今からおよそ六〇〇年前に西表島西部を拠点に活躍した人物として知られる。屋敷跡は、祖納半島の高台にあり祖納堂は西の海を眺めていた、ある晴れた日に水平線の彼方に点のように、雲のように浮かんで見える島影を発見したのが与那国島であったといわれる。後になって祖納堂は与那国島を平定したという。屋敷跡の近くに大竹祖納堂を祀ってある聖地があり、これが「をはたけ根所」で、今では大竹御嶽と呼ばれている。

祖納村は古くは祖納半島にあり、総称して上村と呼ばれていた。大竹祖納堂の屋敷跡からは多量の鉄滓（てっさい）が見つかったり、これを受けて、沖縄県教育委員会は一九八七年（昭和六二）から一九九〇（平成三）までの三年間にわたり、発掘調査を実施した。発掘調査を担当した県教育委員会文化課は「上村遺跡発掘調査報告書」の中でこのように書き綴っている。

「上村遺跡の発掘調査の中から、そこに存在した生産技術の実態をある程度浮き彫りすることができたと考える。特に大竹祖納堂儀佐の屋敷跡といわれている場所や、大竹の根所（拝所）周辺から南西傾斜一帯にかけて無数の鉄滓と日常品が散在している状況に圧倒されると同時に、鉄器の生産地であった可能性もある。そこが鉄器を作り出す鍛冶場であり、また供給地であった可能性を秘めている。」

《中略》出土した遺物から一帯に鍛冶場が存在したことは確実と判断される。出土した鉄滓をみると、やはり鍛錬鍛冶（小鍛冶）を中心とした技術レベルである」とある。

屋敷跡には祖納堂を葬った、といわれる箱式石棺墓もあり、かつては与那国島を眺望した遠見台もあったといわれる。しかし、去るアジア・太平洋戦争中に駐屯した部隊が陣地構築のために石積みをつ壊し、今では跡形も残っていない。

（通事孝作）

西表島祖納にある大竹祖納堂儀佐屋敷跡



『竹富町史 第二巻 竹富島』正誤表

頁	訂正箇所	誤	正
2	凡例6(1)	所属と住所を	所属を
93	右段28・29行目	建っているものもある	建っているものもある
94	左段1行目	『李朝実録』	『朝鮮王朝実録』
100	右段15行目	丸くて食べる	丸くして食べる
120	参考文献	大阪市立八重山群島学術調査隊編	大阪市立大学八重山群島学術調査隊編
137	左段23行目	与へへキ	与フヘキ
161	左段20行目	王妃の閔妃を虐殺	朝鮮国王を拉致拘束
162	左段4行目	自治の体裁	自治の形式
184	左段11行目	福岡功男	福岡留吉
482	[写真5-4-3] キャプション	ビルズマ祭で祈りを捧げる石川明	ウプ入りをする神司・石川明
570	1行目	ヤース ja:nu	ヤース ja:nu
570	7行目	オーッタティンユー。 octa-tu.	オーッタティンユー。 octa-tij-ju.
570	24行目	オーッタティンユー。 octa-tijju.	オーッタティンユー。 octa-tij-ju.
571	3行目	ブーユ bu:ju	ブーユ bu:ju
572	19行目	ヒキドゥリヤ、	ヒキドゥリヤ、
573	6行目	トゥッキタティンユー tukkitij-ju.	トゥッキタティンユー。 tukkita-tij-ju.
574	24行目	ヤラスッタティンユー jarasutta-tij-ju.	ヤラスッタティンユー。 jarasutta-tij-ju.
575	31行目	ヒサレー	ヒサレー
640	右段「金城栄助」の項目	(東金城家)	(金城家)
640	右段「金城亀子代」の項目	(東金城家)	(金城家)
645	左段「玉盛栄昌」の項目	「心学園」	「心泉学園」
650	左段「真栄里文雄」の項目	戦後早々に上欄、警察官となる。	1939年(昭和14)沖縄県警察部巡査拝命、 1940年(昭和15)那覇署勤務で本島に転出。 戦後は警察復興に当たる。
657	昭和43年最右欄		「連絡員・加治工トヨ」を追加
657	昭和44年最右欄		「連絡員・登野城ヒデ」を追加
668	1917年の項目		「・竹富同志会設立。高等科設置を決議」 を削除
668	1917年の項目	・部落統制のための同志会創立(5月15日、 初代会長・大山真麿)。	・部落統制のための同志会創立(5月15日、 初代会長・上岡廣起) 高等科設置を決議。
693	30行目	石垣市字435番地の1	石垣市字登野城435番地の1

※方言表記については『竹富方言辞典』(南山舎、2011年)を参照いただきたい。

平成24年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等からの御寄贈、誠にありがとうございます。

受贈図書（発行年・著者）	寄贈者芳名
アガルビヤシ ―竹富島座間村の芸能―（パンフレット）（1998年・座間民俗芸能保存会）	飯田泰彦
あしびなあ ―伊江島研修特集号― 第20号 （2009年・沖縄県地域史協議会）	沖縄県地域史協議会
石垣在新城郷友会家族名簿 ―創立45周年記念― （2003年・西泊宏信編）	安里精善
石垣市史研究資料5 大浜の民話1 （2012年・石垣市教育委員会教育部市史編集課）	石垣市教育委員会教育部市史編集課
石垣島白保以北の旧村々 ―牧野清生誕百年記念論集― （2011年・石垣繁編）	石垣繁、八重山文化研究会
石垣島で台湾を歩く （2012年・国永美智子、野入直美、松田ヒロ子、松田良孝、水田憲志編著）	国永美智子、野入直美、松田ヒロ子、松田良孝、水田賢志
石島英文 （2012年・三木 健）	三木 健
移民研究 第8号 （2012年・琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門）	琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門
西表東部バナリ郷友会会員名簿 ―創立40周年記念― （2005年・黒島弘充編）	安里精善
大原創立五十五周年記念誌 栄光永えに （2001年・大原創立五十五周年記念誌作成委員会）	新本良明
沖縄感性・文化産業の実現に向けた研究会報告書 ―文化創造と産業振興が連動する地域の仕組み― （2012年・内閣府沖縄総合事務局経済産業部）	内閣府沖縄総合事務局経済産業部
沖縄研究ノート21 《共同研究》南島における民族と宗教（2012年・宮城学院女子大学キリスト教文化研究所《共同研究》南島における民族と宗教編）	宮城学院女子大学キリスト教文化研究所
沖縄県公文書館研究紀要 第14号 （2012年・沖縄県公管理者財団法人沖縄県文化振興会）	沖縄県公文書館指定管理者財団法人沖縄県文化振興会
沖縄県公文書館だより ARCHIVES 第42、43号（2012年・沖縄県公文書館指定管理者財団法人沖縄県文化振興会公文書管理課）	沖縄県公文書館指定管理者財団法人沖縄県文化振興会公文書管理
沖縄県史 資料編22 The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bette Bettelheim 1845 - 54 （2012年・沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県史 資料編23 沖縄戦日本軍史料 沖縄戦6 （2012年・沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県史だより 第21号 （2012年・沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄史料編集紀要 第35号 （2012年・沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班

沖縄県地域史協議会誌 第35号 (2012年・沖縄県地域史協議会)	沖縄県地域史協議会
沖縄文化研究 38 (2012年・法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
沖縄県平和祈念資料館だより No.22、23 (2012年・沖縄県平和祈念資料館)	沖縄県平和祈念資料館
沖縄県平和祈念資料館年報 第12号 (2012年・沖縄県平和祈念資料館)	沖縄県平和祈念資料館
恩納村誌編さん室だより 平成23年度 一第18号 第23号一 (2012年・恩納村誌編さん室)	恩納村誌編さん室
恩納村内遺跡詳細分布調査報告書 一村内遺跡発掘調査等(管内調査)報告書一 (2012年・恩納村教育委員会教育課)	恩納村誌編さん室
恩納村の文化のかおり 一新収蔵品展図録一 (2011年・恩納村博物館)	恩納村博物館
恩納村博物館年報 平成20・21年度 (2011年・恩納村博物館)	恩納村博物館
海人たちの自然誌 アジア・太平洋における海の資源利用一 (1998年・秋道智彌田和正孝)	恩納村誌編さん室
韓国の石干見に関する覚え書き 一『関西学院史学』第34号抜刷一 (2007年・田和正孝)	田和正孝
ぎのわんの地名 一内陸部編一 本文・付録地図 (2012年・宜野湾市教育委員会文化課)	宜野湾市教育委員会文化課
金武町の歴史と文化 第6集 スージン小探訪 (2012年・金武町教育委員会)	金武町教育委員会
小浜島の近現代の人物略伝 一明治・大正・昭和に生きる一 (2012年・新本光孝)	新本光孝
宿道(しゅくみち) vol. 33 (2012年・一般社団法人沖縄しまて協会『宿道』編集部)	一般社団法人沖縄しまて協会『宿道』編集部
首里城研究 No.14 (2012年・首里城研究会)	首里城公園友の会事務局
首里城公園管理センター調査研究・普及啓発事業年報 No.2 (2012年・池田孝之編)	海洋博覧会記念公園管理財団
首里城公園管理センター萬野裕昭コレクション調査報告書 (2011年・首里城公園管理センター事業課調査展示係編)	海洋博覧会記念公園管理財団
証言による朗読劇 ハテルマ・ハテルマ (パンフレット) (2010年・作演出/栗原省)	栗原省、玉城功一
新聞で見る竹富町の子ども・教育 平成21年度 (竹富町教育委員会)	竹富町教育委員会
新聞で見る竹富町の子ども・教育 平成22年度 (竹富町教育委員会)	竹富町教育委員会
1910年代における澎湖列島北部の石干見漁業 一『人文地理』第58巻第1号抜刷一 (2006年・田和正孝)	田和正孝
ダートウーダー探訪の旅 一小浜島民俗歌舞の源流をたどる一 (2012年・黒島精耕)	黒島精耕
竹富島総合調査報告書2012 (2012年・沖縄県立博物館・美術館 博物館班)	沖縄県立博物館・美術館 博物館班

中琉歴史関係档案 嘉慶朝 (1) (2), 乾隆期 (17) (中国第一歴史档案館)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『テンバスト』考 ―小説と史実の間― 〈『南島文化』(沖縄国際大学南島文化研究所紀要) 第34号抜刷〉(2012年・西里喜行)	西里喜行
東海大学学術史ニュース №7 (2012年・東海大学学術史資料センター)	東海大学学術史資料センター
東海大学資料叢書2 航空科学専門学校関係資料集 (2012年・東海大学学術史資料センター)	東海大学学術史資料センター
東南アジアの魚と人びと (2006年・田和正孝)	田和正孝
豊見城市史だより 第11号 ―私たちもトミグスクンチュ『豊見城市史 移民編』現地調査報告―	豊見城市教育委員会文化課
なきじん研究 ―山原のムラ・シマ講座及び調査記録― vol. 18 (2011年・今帰仁村歴史文化センター)	今帰仁村教育委員会今帰仁村歴史文化センター
今帰仁村文化協会創立10周年記念誌 (2012年・今帰仁村文化協会)	今帰仁村文化協会
那覇市歴史博物館企画展 あれから40年 ―OKINAWA から沖縄― (2012年・那覇市市民文化博物館・歴史博物館)	那覇市市民文化博物館・歴史博物館
那覇市歴史博物館企画展 開館5周年記念 歴史博物館収蔵品展 皆の記憶 (2012年・那覇市歴史博物館)	那覇市市民文化博物館・歴史博物館
那覇文化 第10号 (2012年・那覇市文化協会)	宮良安彦
南燈寮草創記 (1995年・南燈寮草創記編集委員会)	阿佐伊孫良
法政大学沖縄文化研究所所報 第70, 71号 (2012年・法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
八重山群島出土の古陶磁について 〈物質文化31抜刷〉 (1978年・大浜永豆、関口広次)	竹富町教育委員会
八重山における原始古代文化の問題と試論 (冊子) (1982年・大浜永豆)	竹富町教育委員会
八重山の民衆詩人 石島英文 ―人と作品・楽曲CD付き― (2012年・三木健)	三木 健
八重山文化研究会会報 (2011年度・2012年度分・飯田泰彦編)	八重山文化研究会
読谷村史 第六巻 資料編5 統計にみる読谷山 (2012年・読谷村史編集委員会)	読谷村役場
離島の情報通信基盤整備による生活コスト等の低減に関する調査報告 ―平成23年度沖縄振興総合調査― (2012年・国建)	内閣府沖縄総合事務局総務部調査企画課
琉球の方言 36 (2012年・法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
歴博 ―特集・沖縄 自然・開発・イメージ― №175 (2012年・国立歴史民俗博物館)	国立歴史民俗博物館
BEER BREAK №79 (2012年・オリオンビール株式会社)	光文堂コミュニケーション株式会社
Stone Tidal Weirs of East Asia in Transition ―『人文論究』第59巻第4号抜刷― (2010年・Masataka TAWA)	田和正孝

竹富町史の刊行物

- 1、『竹富町史』別巻2 竹富町関係文献目録 1990年度(平成2) 関係機関へ配付
竹富町関係の文献資料の標題、内容、所蔵機関等を各島ごとにまとめた調査研究のための手引き書。日本十進分類法(NDC)に準じて、一般、哲学・宗教、歴史、社会科学(社会科学一般、行財政、教育)、自然科学(自然科学一般、地理・地質、海洋・気象、植物、動物一般、鳥類、医学・衛生)、工学・工業、産業(産業一般、開発・土地問題)、芸術、言語、文学に分類して文献の発行日順に編集、末尾には所蔵機関を明記してある。B5版 ソフトカバー簡易製本 117頁。
- 2、『竹富町史』別巻3 写真集 ばいぬしまじま 1992年(平成4) ¥2,625
明治時代中後期から現代に至るまでの島々の実相を、各島ごとに村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、暮らし・戦争、祭祀・芸能の各項目に分類して写真で表現した資料集。92枚の写真を用い、各島ごとに、一言で島を知る題名を標題に付け、島の“顔”を呈示する。モノクロ写真を主体に編集しているが、巻頭にはカラー写真を用い、竹富町の“今”をアピールしている。写真から古き良き時代の島々を偲ぶことができる。A4版 糸かがり上製本 319頁。
- 3、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅰ 1993年度(平成5) ¥2,100
1898年(明治31)から1918年(大正7)までの間、沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。収録した新聞は、県内で最初に発行された、「琉球新報」(明治26年創刊)、「沖縄毎日新聞」(明治41年創刊)の二紙。「明治・大正期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、文化等の記事を古い順に配列して編集した。県紙であるため、八重山関係の記事は少ないが、それでも西表炭坑や八重山の地誌等の記事は特値に値する。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 684頁。
- 4、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅱ 1994年度(平成6) ¥2,100
1917年(大正6)7月から1933年(昭和8)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「先島新聞」(大正6年7月～同15年8月)、「八重山新報」(大正10年2月～昭和8年12月)、「先島朝日新聞」(昭和3年5月～同8年12月)、「八重山民報」(昭和7年1月～同8年12月)の三紙。「大正・昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は村勢、マラリア問題、村の行財政、選挙等が注目され、往時の竹富村を浮き彫りにしている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 724頁。
- 5、『竹富町史』第十二巻資料編 戦争体験記録 1995年度(平成7) ¥3,150
アジア太平洋戦争中の町内の世帯別戦災実態調査、全戦没者数、戦争体験記及び沖縄戦、八重山の戦争をまとめた資料集。各島、各集落ごとに詳細な戦災調査を行い、町内における戦争の実態を明らかにしている。特筆すべきは戦時中の集落地図を作製するとともに、さらに集落ごとに各家族単位の戦争被害を具体的に図表にしていること。この資料集から戦争マラリア等の惨事を浮かび上がらせ、戦争がいかに悲惨だったかが分かる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 1,190頁。
- 6、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅲ 1996年度(平成8) ¥2,100
1934年(昭和9)2月から1945年(同20)3月までの間、八重山と沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山新報」(昭和9年2月)、「先島朝日新聞」(昭和9年1月～同15年8月)、「八重山民報」(昭和9年1月～同11年6月)、「海南時報」(昭和10年8月～同20年3月)、「沖縄日報」(昭和11年11月～同15年10月)、「琉球新報」(昭和13年2月～同15年11月)六紙。「昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料に盛り込まれた記事は多岐にわたるが、当時の世相を反映し、戦時色の濃い記事が目立つ。それでも記者の島を訪ねてのルポルタージュ記事は、往時の島の一面を垣間見せる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 720頁。
- 7、『竹富町制施行50周年記念誌』ばいぬしまじま50 1998年度(平成10) ¥2,625
1948年(昭和23)の町制施行から1998年(平成10)までの竹富町の50年の足跡を写真、年表等で集成した記念誌。本誌は、島びとの暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真を使用して編集され、その年の人口も掲載し、資料的な価値を持たせるように工夫してある。歴史年表は行政に限らず、婦人会、青年会等の動向も扱い可能な限り詳細に、年別の事項を入れてある。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流の歩みも盛り込まれている。歴代町長、歴代議会議長、

町議会議議員、各課課長の顔写真、職員の集合写真、竹富町振興目票も掲載してある。A4版
糸かがり上製本 247頁。

8、『竹富町史』資料集① 鉄田義司日記 1999年(平成11) ￥1,575

和歌山県久度山町出身の陸軍少尉(後に中尉・大尉)鉄田義司が残した戦時中に書き残した個人的な陣中日記。彼は1941年(昭和16)、内離島に司令部を置く船浮要塞に赴任したが、その後所属する大隊が石垣島に移転したため、石垣島に移った。日記には赴任の時から要塞での軍事訓練や、石垣島に移駐後に米軍機から初空襲を受けた時の様子、さらに1945年(昭和20)、敗戦後の復員までに至る経過を記す。八重山の戦争を知る同時代資料として価値を有する。A5版 ソフトカバー簡易製本 519頁。

9、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅳ 2000年度(平成12) ￥2,100

1947年(昭和22)1月から1955年(同30)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は、「海南時報」(昭和22年1月～同30年12月)、「八重山タイムス」(昭和22年1月～同30年12月)、「南西新報」(昭和22年9月～同28年10月)、「自由民報」(昭和23年7月～同29年1月)、「南琉日日新聞」(後に「八重山毎日新聞」と改題、昭和25年3月～同30年12月)、「八重山新報」(昭和30年4月～同10月)の六紙。「昭和戦後期①の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、終戦直後の島々の様子を綴っているが、当時の新聞が一種の「政論新聞」だったこともあり、選挙に関する記事には政治色が濃厚に出ている。それでも紙面から島びとの暮らしを窺い知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 842頁。

10、『竹富町史』第十巻資料編 近代2 2001年度(平成13) ￥2,625

南嶋民俗資料館(石垣市宇大川)が所蔵する崎原文書「必要書」、琉球大学附属図書館(西原町千原)が所蔵する宮良殿内文書「必要書類集」を集成した近代文書の資料集編。「必要書」は、崎原當貴が残した文書。當貴は1897年(明治30)に崎山村頭に任じられている。この文書は一種の備忘録で、日記の形式をとる。中でも「人々ヨリ到来物控」は、贈答品のやりとりがあり、往時の村びとの暮らしぶりが随分分かる。「必要書類集」は宮良殿内の直系である宮良當整が残した文書である。標題に「明治二十五年以降」とあるが、1896年(明治29)から1907年(同40)までの間の行政文書となっている。當整は白保村頭、新城村頭、竹富村頭を務めたが、行政文書は八重山島庁との往復文書、農業統計資料が中心である。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 348頁。

11、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅴ 2002年度(平成14) ￥2,100

1956年(昭和31)1月から1960年(同35)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「海南時報」(昭和31年1月～同34年4月)、「八重山タイムス」(昭和31年1月～同35年12月)、「八重山毎日新聞」(昭和31年1月～同35年12月)、「八重山新報」(昭和31年1月～同33年3月)の四紙。「昭和戦後期②の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、多岐にわたるが、西表島開発問題をめぐる様々な調査、早稲田大学八重山学術調査団に関する記事等は歴史の一瞬として特筆される。なかでも、町長選挙等を巡る記事は、当時の政治の季節を反映し、激しい紙面づくりを展開している。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 843頁。

12、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成Ⅵ 2003年度(平成15) ￥2,100

1961年(昭和36)1月から1964年(同39)7月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山タイムス」(昭和36年1月～同39年7月)、「八重山毎日新聞」(昭和36年1月～同39年7月)、「八重山朝日新聞」(昭和37年1月～同39年7月)の三紙。「昭和戦後期③の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。収録された記事は、各新聞社によって特色があるが、総じて西表開発問題、町有地処分問題と新庁舎建設、八重山市町村合併と町役場移転問題、西表島での米軍事演習、大干ばつ、西表島での中学校統合問題、一年に二度の町長選挙等の記事がクローズアップされる。記事の中には現在に結びつくものもある。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 947頁。

13、『竹富町史』第十巻資料編 近代1 2004年度(平成16) ￥2,625

竹富島喜宝院蒐集館が所蔵する明治30年代の文書を「近代1」として集成した近代文書の資料集。収録した史料は「村日記-明治37年以降」、「間切島会二閣スル書類-自明治31年 至全37年・自明治37年至」、「報告綴-明治37年」、「人頭税領収証綴-自明治31年 至明治35年」、「契約及

金銭物品二箇スル諸証書—自明治31年 至全36年」の五点。喜宝院蒐集館にはこのほか、数多くの民俗資料等があるが、これらの一部は写真に収め、口絵として扱った。史料から人頭税施行末期及び廃止直後の島の様子を知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 546頁。

14、『竹富町史』第十巻資料編 近代3 2005年度(平成17) ￥2,625

琉球大学附属図書館が所蔵する宮良殿内文書のひとつ。明治30年代初中期の宮良當整日記を「新城村頭の日記」の副題を付け、「近代3」として集成した近代文書の資料編。宮良當整は1897年(明治30)から1903年(同36)まで新城村頭を勤めた。収録資料は新城村頭時代に書き残した「明治三十三年 日記 宮良記」「自明治三十四年丑年旧正月 至全十二月 日記 宮良當整」と表題の付された近代文書。文字中心の資料編だが、ビジュアル感覚を少しでも取り入れることを基本に、新城島にかかわる写真を口絵として配した。史料は當整の私的な日記だが、明治期の新城島の人々の暮らしなどを窺知できる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 600頁。

15、『竹富町史』第十巻資料編 近代4 2006年度(平成18) ￥2,625

沖縄県地域史協議会がマイクロフィルムより複製した明治・大正・昭和戦前期の沖縄県に関わる『官報』の記事の中から、八重山関係の記事を検索して収録した資料編。副題に「官報にみる八重山」を付した。『官報』は1883年(明治16)7月2日に創刊され、以後、日刊紙として発行されている。記事は、国会・内閣・裁判所等で決定した事項を国民に知らせる広報紙および民間に関わる広告紙としての性格を有しているとはいえ、行政上の歴史的事実を知るうえで十分な資料的価値がある。記事の中には、人頭税の廃止を裏付ける法律の施行、鉱業権に基づき申請する石炭等の鉱物の試掘・採掘願いの記事もある。「新聞集成」と合わせて利用すると、近代八重山の側面が浮かび上がってくる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 659頁。

16、『竹富町史』第十巻資料編 近代5 2008・2009年度(平成20・21) ￥2,625

波照間公民館が原本(所在不明)を所蔵していたと思われ、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室が複製本を所蔵する「島庁通達綴 自明治三十五年一月 至三十七年十二月 波照間村事務所」、「波照間島番所日記(明治二十八年～二十九年)」、それに波照間小学校が保管する「波照間小学校沿革誌(第老部)」の三資料を、「波照間島近代資料集」の副題を付け「近代5」として集成した近代文書の資料編。「島庁通達綴」が送付された時代は人頭税が暮を閉じ、日露戦争が勃発して日本が帝国主義を歩み始める時期にあたる。資料には日露戦争にかかわる通達等もある。また、標題がないため仮に付したであろう「波照間島番所日記」は1895年(明治28)～1896年(同29)までの村番所の動向を日記スタイルで書き止めたもので、島の人物が数多く登場し、祭祀も載っており貴重なものである。「波照間小学校沿革誌」は、1894年(明治27)～1948年(昭和23)までの学校の沿革を「第老部」としてまとめられている。学校の生徒数、人事異動、記念日などが記され、太平洋戦争になると強制疎開のことなどが記されている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 434頁。

17、『竹富町史』第二巻 竹富島 2011年度(平成23) ￥3,150

『竹富町史』の第一弾を飾る島々編の史誌である。第二巻「竹富島」には、序章「うつぐみの島」、第1章「集落と自然」、第2章「歴史と伝承」、第3章「教育」、第4章「人と暮らし」、第5章「信仰と祭祀」、第6章「人の一生」、第7章「言語伝承」、第8章「竹富島の芸能」、第9章「人物」、第10章「歴史年表」、終章「竹富島の過去・現在・未来」が盛り込まれている。巻頭には島の伝統芸能である、種子取祭などの写真が掲載され、視覚に訴える編集方法が取られている。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮した。B5版 糸かがり上製本 700頁。

18、『竹富町史』第三巻 小浜島 2011年度(平成23) 本体3,150円

『竹富町史』島々編の史誌である。第三巻「小浜島」には、序章「かふぬ島 小浜」、第1章「島の概況」、第2章「歴史と伝承」、第3章「教育」、第4章「人と暮らし」、第5章「信仰と祭祀」、第6章「人の一生」など14章が盛り込まれている。そして、終章「ちゅうさんの島 小浜」で締めくくる。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮している。B5版 糸かがり上製本 678頁。

※竹富町史の刊行物は、石垣市・那覇市・宜野湾市の主な委託販売契約店での販売を行っております。詳細については、竹富町教育委員会総務課史編集係(電話0980-88-7220)までお問い合わせください。

編集後記

『竹富町史だより』第34号を発刊することができました。今号は、これまで刊行した「島じま編」の「書評特集号1・2」と「新刊紹介」と銘打つての特集です。刊行した書籍は、『竹富町史』第二巻「竹富島」と「竹富町史」第三巻「小浜島」の二冊です。書評を掲載したのは、泉紙の「沖縄タイムス」「琉球新報」と地元紙の「八重山毎日新聞」「八重山日報」で、今回は転載して読者に読んでもらう趣旨で取り扱っています。書き手は11人です。書評は、どれも興味深い内容になっています。

◆「第二巻竹富島」は序章に「うつぐみの島竹富島」がトップを飾り、「集落と自然」「歴史と伝承」「教育」「人と暮らし」など第10章で成り立ち、最後は終章で締めています。「第三巻小浜島」は「かふぬ島 小浜」が序章を飾り、「島の概況」「自然」「歴史と伝承」「人と暮らし」「信仰と祭祀」「人生儀礼」など第14章からなり、終章で締めています。目次は「竹富島」「小浜島」でほぼ同じですが、中身には島独自の歴史や文化などの執筆もあります。

◆「島じま編」の編集は今年度は、「第五巻新島島」になります。「竹富島」「小浜島」とは違ったユニークな島史話になりそうです。



平成25年3月31日発行

竹 富 町 史 だ よ り

第 34 号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1

☎ 0980-82-6191